木蘭伝説の現在

――中国の国語教科書と楽府「木蘭詩」――

弓　削　俊　洋

男装の麗人・木蘭をヒロインにした「木蘭伝説」は、南北朝時代の楽府「木蘭詩」[1)]に始まり、唐代の白楽天や杜牧の詩[2)]、明代の雑劇「雌木蘭替父従軍」[3)]、清代の小説「隋唐演義」[4)]などを経て、20世紀の中国、さらには日本やアメリカにまで継承されている。たとえば、『映像学』74号掲載の晏妮論文[5)]には、木蘭を主人公にした20世紀の作品として以下のものが挙げられている。

映画『花木蘭』(1927年　天一青年影片公司　監督：李萍倩)

映画『木蘭従軍』(1928年　民新影片公司　監督：侯曜)

映画『木蘭従軍』(1939年　中国聯合影片公司華成制片廠)

話劇『花木蘭』(1941年　中国旅行劇団　脚本：周貽白)

同上日本語台本『木蘭従軍』(1941年　周貽白作　高木嵩華訳　興文社)

東宝国民劇『木蘭従軍』(1941年　白井鐵造作)

桂劇『木蘭従軍』(1942年　欧陽予倩作　1944年２月16、17日公演)

映画『花木蘭』(1956年　長春電影製片廠　監督：隆国権、張辛実)

京劇『木蘭従軍』(1959年　馬少波作)

映画『花木蘭』(1964年　香港ショー・ブラザース　監督：岳楓)

ＴＶ『新編花木蘭』(1998年　香港)

ディズニー・アニメ『ムーラン』(1998年　アメリカ)

小説『風よ、万里を翔けよ』(1998年　中央公論社　田中芳樹)

漫画『風よ、万里を翔けよ』(1999年　角川書店　秋乃茉莉)

このように、20世紀にあってもなお、映画、話劇、京劇、桂劇、テレビ、アニメ、小説、漫画など実に多様なジャンルにおいて木蘭像が表象され、新たな伝説が生み出されている。この一事をもってしても、木蘭という巾幗英雄がいかに人々を魅了し、愛されてきたのかが分かろうというものである。

本稿では、こうした「木蘭伝説」最初のテクストであり、「後世にはかりしれないほどの大きな影響を与え」たと言われる[6]楽府「木蘭詩」について、中国（大陸および台湾）の国語教科書がどのように解釈、評価し、この作品の何を今の子供たちに伝えていこうとしているのかを考察する。それは同時に、大陸と台湾における文化遺産継承の理念や方法、さらにはまた、教育理念や政策の差違を探求することにもなるであろう。

なお、「木蘭詩」掲載の国語教科書（大陸では「語文」、台湾では「国文」と称する）のうち、本稿では、教師用指導書[7]も入手できた以下の三社[8]の教科書を対象として検討していく。

①人民教育出版社『義務教育課程標準実験教科書　語文　7年級　下冊』
（人民教育出版社　2001年12月第1版　2005年1月第5次印刷）

②語文出版社『義務教育課程標準実験教科書　語文　7年級　上』
（語文出版社　2004年5月第2版　2007年6月第15次印刷）

③台湾・南一書局『國民中學　國文　第4冊』
（南一書局企業股份有限公司　中華民国95年2月初版　97年2月修訂版）

1.「木蘭伝説」最初のテクスト　楽府「木蘭詩」

前述のように「木蘭伝説」最初のテクストが楽府「木蘭詩」である。

その成立については、大陸、台湾の教科書は一致して南北朝時代としており[9]、井波律子氏によれば、北朝の北魏（439～534）で誕生したこの作品は、「もともと歌詞は鮮卑語だったらしいが、南に流伝し、南陵の頃、手を加えて漢語訳され、ほぼ現在見られる形になった」とされる[10]。そして、この「木蘭詩」で表象された木蘭像は、それ以後の時代を生きる人々の様々な思いを託し

て展開される木蘭伝説の源になるわけである。

有名な作品であり字数も多い（330字）のだが、後の検討の基本資料ともなるので、先ずは以下に詩の全文[11]、日本語訳[12]を提示する（ローマ字A～F、番号①②…は引用者による）。

「木蘭詩」

A①唧唧復唧唧，木蘭當戸織。
②不聞機杼聲，唯聞女歎息。
③問女何所思，問女何所憶。
④女亦無所思，女亦無所憶。
⑤昨夜見軍帖，可汗大點兵。
⑥軍書十二卷，卷卷有爺名。
⑦阿爺無大兒，木蘭無長兄，
⑧願爲市鞍馬，従此替爺征。
B①東市買駿馬，西市買鞍韉，
②南市買轡頭，北市買長鞭。
③旦辭爺孃去，暮宿黄河邊，
④不聞爺孃喚女聲，但聞黄河流水鳴濺濺。
⑤旦辭黄河去，暮至黒山頭，
⑥不聞爺孃喚女聲，但聞燕山胡騎鳴啾啾。
C①萬里赴戎機，關山度若飛。
②朔氣傳金柝、寒光照鐵衣。
③將軍百戰死，壯士十年歸。
D①歸来見天子，天子坐明堂。
②策勳十二轉，賞賜百千彊。
③可汗問所欲，木蘭不用尚書郎；
④願馳千里足，送兒還故鄉。
E①爺孃聞女來，出郭相扶將；

②阿姉聞妹來，當戸理紅妝；

③小弟聞姉來，磨刀霍霍向豬羊。

④開我東閣門，坐我西閣牀，

⑤脱我戰時袍，著我舊時裳，

⑥當窗理雲鬢，挂鏡帖花黄。

⑦出門看火伴，火伴皆驚忙，

⑧同行十二年，不知木蘭是女郎。

F①雄兎脚撲朔，雌兎眼迷離；

②雙兎傍地走，安能辨我是雄雌。

「木蘭詩」日本語訳

A①パタンパタンまたパタン、木蘭は戸口に向かって機(はた)を織る。

②（でも今日は）機の音が聞こえない。木蘭の溜息だけが聞こえてくる。

③「木蘭よ、誰かに恋をしたのかね？ 何かを思い出しているのかね？」

④「恋をしているのでも、思い出してるのでもありません。

⑤ゆうべ、軍の徴兵名簿を見たの。皇帝は大々的に兵隊をお集めです。

⑥軍書十二巻の徴兵名簿の、どの巻にも父さんの名前があります。

⑦父さんには大人の男の子がなく、わたしに兄さんはいません。

⑧だから、私が鞍と馬を買って、父さんの替わりに出征します。」

B①彼女は東の市場で駿馬を買い、西の市場で鞍と鞍敷を買い、

②南の市場でくつわを買い、北の市場でムチを買った。

③彼女は朝、父と母に別れを告げて、日暮れには黄河のほとりに泊まる。

④両親が娘を呼ぶ声が聞こえない。聞こえるのは滔々たる黄河の音のみ。

⑤夜明けに黄河を出発して、夕暮れに黒山の麓に着いた。

⑥両親が娘を呼ぶ声が、聞こえない。

聞こえるのは燕山で鳴く軍馬の悲しい声だけ。

C①万里の道を決戦場にむかい、関所や山々を飛ぶように越える。

②北の寒い風はドラの音を伝え、冷たい光が鉄のよろいを照らす。

③将軍は百戦のすえに戦死し、勇士は十年たって凱旋した。

D①戦場から帰り、皇帝に謁見した。 皇帝は御殿（の玉座）にすわっていた。

②木蘭は功績抜群で、十二階級特進、褒美にもらった品は百千余り。

③皇帝がさらに希望をたずねると、「尚書郎のような官位はいりません。

④私めは、千里の馬を駆って、故郷に帰ることを希望します。」

E①両親は、娘が帰ると聞いて、城郭の外に出て寄り添い待った。

②姉は、妹が帰ると聞いて、戸口に向かって化粧を直した。

③弟は、姉が帰ると聞いて、豚や羊をさばくため包丁を磨いた。

④木蘭は帰ると、東の建物の門をあけ、西の建物の長椅子に腰掛けた。

⑤そして軍服を脱ぎ、昔の衣装に着替えた。

⑥窓辺に向かって豊かな髪を整え、鏡を掛けて見ながら白粉をつけた。

⑦門を出て、戦友たちに会うと、戦友はみな、腰をぬかして言った。

⑧「十二年もいっしょにいたのに、木蘭、君が女性とは気づかなかった！」

F①「雄ウサギは足を少し引きずり

雌ウサギは目がぼんやりとしているけれど

②それでも、もし二匹が並んで走ったら、

どっちがオスかメスか、見分けられるものではありません。」

以上のように「木蘭詩」は、(A)木蘭が父に代わって出征する決心を固める→(B)従軍の準備を整えて戦地に赴く→(C)戦場から凱旋する→(D)破格の昇進話を辞退する→(E)帰郷して「女性」に戻る→(F)比喩を用いた解説、という構成になっている。

この詩の「物語」としての面白さは、少女が男装して戦場に赴くという設定そのものにあるが、井波氏も言うように[13]、最大の見せ場は、木蘭が「女］だと知った「火伴」たちが驚嘆するところである。「同行すること十二年、知らず木蘭　これ女郎なるを」（E⑦⑧）と呻く場面には、戦友たちの驚き慌てるさまが活写されおり、口を開け目を丸くする表情までもが目に浮かぶようだ。さらにこの場面は、戦友たちをここまで驚愕させたのは、木蘭が単に女性であっ

ただけでなく、輝くばかりに美しい「麗人」だったからであろう、という連想にも誘う。それゆえに「木蘭詩」に題材を取る20世紀の映画や演劇も、女性に回帰した木蘭の登場シーンを、いかに艶やかに、いかに華やかに演出するかで腕を競ってきたのである[14]。

もっとも、木蘭の容貌については、実は、「窓に当たりて雲鬢を理(おさ)め，鏡を挂けて花黄を帖(つ)け」（E⑤⑥）と言うにとどまり、具体的な描写はない。そういう点で「木蘭詩」には、木蘭伝説の原形は認められるのものの、「麗人」としての明確なキャラクターは提示されていないのである。

同時に、確認しておくべきは、「壮士」の像もまた明瞭な輪郭が見えてこないという点である。詩中には、華々しい戦闘シーンも、敵を次々となぎ倒す木蘭の勇姿も登場せず、むしろ印象的に描出されるのは、寂寥たる戦場で不安や孤独感に呵まれる少女の心象風景なのである。（C②朔気停金柝、寒光照鐵衣　B⑥不聞爺娘喚女聲，但聞燕山胡騎鳴啾啾）

したがって、もし仮に、詩本体に即して「主題」を導き出すとすれば、親思いの少女が父に代わって従軍し、戦場での孤独や不安を堪え忍び、戦功による出世も辞退して家族のもとに帰る、という「孝」の精神になるであろう。そもそも父への召集令状を前にして苦悩する木蘭が結局「代父従軍」を決意するのも、（おそらくは年老いた、あるいはさらに病弱の）父を戦地には行かせられない、さりとて応じなければ罰せられると、ひたすら父の行く末を案じてのことであった。

また、先述の戦場での孤独感は逆に両親を想う強い気持ちの裏返しの表現でもあるし、昇進を辞退して帰郷するのにも、愛する家族のもとへ一刻でも早く帰りたいという思いが大いに与っていたことは間違いない。さらに、E①②③では、帰郷する娘を、妹を、姉を迎える家族の喜びを描いて、「家族の絆」の美しさが賛美されている。（「爺孃聞女來，出郭相扶將；」「阿姊聞妹來，當戸理紅妝；」「小弟聞姊來，磨刀霍霍向豬羊。」）

つまりは戦場で颯爽と闘う「巾幗英雄」の勇姿よりも、親を案じ家族を思う「孝」の精神、「家族愛」の称揚こそが、「木蘭詩」の主題であり、そこに木蘭

伝説の「原風景」もあると言うべきであろう。

2．台湾『国文』教科書における「木蘭詩」

こうした「原風景」を尊重して、「孝女」という観点から「木蘭詩」の特徴を解説するのが、台湾・南一書局版『国文』教科書である[15]。

それは「木蘭詩」を収録する単元四のタイトルが「親情無限（肉親の情は無限である）」[16]であるところに象徴的に示されてもいるのだが、例えば解説文「課文賞析」では、「木蘭詩」の「主旨」について以下のように説明する。

> 本詩の主旨は木蘭の**孝行**を表彰することである。「木蘭は女性である」のに父に代わって従軍したというところに詩全体の叙述の重点をおくからである。したがって、作者は主要な文章を木蘭が従軍する前と凱旋後の帰郷についての描写に費やし、多年にわたる征戦生活については「万里 戎機に赴く」以下の六句（第一章「木蘭詩」C①②③）に精錬・概括しているのである。
>
> 本詩は、叙事に優れているだけでなく、深い感情を表現することにも優れている。例えば、召集令状を見た後で機を止め嘆息したり、凱旋後には一日も早い帰郷を望むところには、木蘭の**孝思**（孝心）が描き出されている。また、家族が歓迎する場面には、深い家族愛が満ちあふれている。最も感動的に描かれているのは、「朝に爺孃を辞し去り」以下の八句（B③～⑥）である。（中略）見知らぬ異郷にあって、父母が娘を呼ぶ声は聞こえず、聞こえるのはただ「黄河の流水 鳴ること濺濺たる」と「燕山の胡騎 鳴くこと啾啾たる」だけ、という、これらの句は従軍の過程を叙述すると同時に、木蘭の望郷の思いと両親を懐かしむ思いが表現されている。
>
> 以上のような多寡適切な叙述、興味をそそる筋立て、自然で滑らかな言語、さらに類疊[17]、問答、頂真[18]、拝批[19]などの民間歌謡に常用の表現手法を組み合わせて、木蘭という巾幗英雄像を成功裏に創造し、女性の**孝順**、機知の美徳を賛美しているのである[20]（括弧内と下線は引用者による。以

下も同じ)。

このように、南一書局『国文』教科書は、第一に代父従軍の経緯と凱旋後の家族との再会を主に描いている点、第二には「深い感情を表現することに優れており」、その「感情」は木蘭の「孝思（孝心)」、家族愛である点を理由にして、詩の主題が木蘭の孝心への表彰、孝順という美徳への賛美であると結論するのである。最後の「孝順」が美徳であるかどうかは別にして、詩本文に即しながら、忠実かつ素直に詩の「主旨」を分析しており、全体として納得のいく評価だと言えよう。

こうした詩解釈は、「学習重点」や「課文導読」においても見ることができ、それぞれ「木蘭の**孝親**（親孝行）の情操を理解する」、「自然で滑らかな言語、生き生きとした描写によって、木蘭の**孝思**（孝心）を余すところなく表現している」と述べている。

さらに、「問題与討論（一)」で、「詩のどこの部分から木蘭の**孝思**（孝心）を見いだすことができますか？　（そう考えるのは）なぜですか？」という問題を設定して、生徒たち自身に回答させるのも、その例である。

ちなみに、教師用指導書『教師手冊』によれば、この模範解答は以下のようになる。

「磯杼の声を聞かず、惟だ女の歎息を聞くのみ」「昨夜 軍帖を見るに，可汗 大いに兵を点ず。軍書十二巻，巻巻に爺の名あり。阿爺に大児なく，木蘭に長兄なし。願くは為に鞍馬を市(か)いて，これより爺に替わりて征かん」。これらの句は、普段は機織りに精を出す木蘭が、父親が出征しなければならないことを案じて、愁いに沈むところを描写している。父親は老齢であって軍隊生活には耐えきれない、自分には父に代わって従軍できるような兄もいないと、あれこれ悩んだ末に、男装して代父従軍することを決意するのである。

「旦に爺孃を辞し去り，暮れに黄河の邊りに宿る」から「但だ聞く燕山の胡騎 鳴くこと啾啾たるを」までには、「爺孃の女を喚ぶ声を聞かず」と

いう句が重複使用されており、木蘭が出征していてもなお遙か故郷にいる両親を思っていることが表現されている。

「可汗 欲する所を聞けば，木蘭 用いず尚書郎；願くは千里の足を馳せて[21]、児を送りて故郷に還らしめよ」では、光輝の戦功を立てた木蘭が、官職を望まず、故郷への帰還だけを願っている。これは、父に代わって従軍し、勇気を奮い起こして戦ったのが、ただひたすら「孝」の一字のためであったことを表現している。彼女の最大の希望は家族との団欒、親のそばに仕えることであり、孝順な娘になることなのである[22]。

以上、台湾・南一書局版教科書では、「孝行」「孝思」「孝順」「孝親」といった言葉によって、「孝女」木蘭が繰り返し賞賛されており、「考」という「美徳」をいまの子ども達に継承させることが、「木蘭詩」収録の大きな理由であることは明白である[23]。

かくして「木蘭詩」は、一種の修身、道徳の教材として活用されるわけであるが、しかし同じ道徳でも、そこに「政治」的意味合いを付加していくのが、大陸『語文』教科書の特徴である。

3．大陸「語文」教科書における「木蘭詩」

①「中華民族の美徳の体現者」

もちろん、「木蘭詩」における描写の重点が「孝」にあることは、大陸でも認めてはいる。例えば、人民教育出版社『教師教学用書』には以下のような記述がみられる。

この詩で突出させようとしているのは正に、親に孝行し（「孝敬父母」）、勇気をもって重責を担う木蘭の性格に対する賛美である。したがって、残酷な戦争に対しては簡単に触れるだけであり、逆に、美しい心根を描くことには筆を惜しまないのである[24]。

このように、木蘭の親孝行が「突出」して描かれていることは肯定される。しかし、大陸にあっては、親への「孝」を、今に継承すべき最大の「美徳」としては位置づけない。次の引用にあるように、木蘭の体現する種々の「美徳」のひとつとして、しかも「愛家（家族愛）」という曖昧な表現によって触れられるのみである。

「木蘭詩」はわずか300字にすぎないが、木蘭の勤労、勇敢、機知、愛国、愛家(家族愛)、権力財産を思わないという人間像を生き生きとリアルに描き出している。木蘭は当時の女性の表象の代表であり模範である[25]。

「親孝行」は「愛家」のひとつの要素ではあろうが、イコールではないし、その「愛家」さえもが、「勤労」「勇敢」「機知」といった美徳と並列に位置づけられている。さらに、解説文によっては、「孝」ということに全く言及しないものさえある。

彼女の身には、中華民族の勤労、善良、機知、勇敢、純朴という美徳が集中している。つまり作者は、自分の求める人間の品性をすべて彼女に賦与し、健康明朗にして、人情味豊かな女性英雄に適合するようにしている。それゆえに、今に至るまでずっと人々に愛され続けているのである[26]。

木蘭の身には、中華民族の勤労、善良、機知、勇敢、純朴という美徳が集中している。十年ものあいだ変装して戦場を駆け回るという伝記的な経歴、全詩に溢れる高邁な英雄主義の精神は濃厚な浪漫主義の色彩を帯びさせている。「木蘭詩」は、古代文学史上のリアリズムとロマンチシズムの色彩をもっているというにふさわしい。一千年以上にわたって、木蘭の名はあまねく知れ渡り、多くのところで木蘭の伝説と遺跡が出現してきた。木蘭の代父従軍の話は必ずしも歴史的事実ではないが、この人物像がほんとうに多くの人々から愛されていることが分かるのである[27]。

南一書局版教科書で「突出」的に強調されていた「孝」は、多くの美徳のなかに相対化される（あるいはまた無視を決め込まれる）のであり、それが大陸

における「木蘭詩」解釈の特徴の一つである。

と同時に、注目すべきは、いくつもの美徳の前に、「中華民族」という言葉が冠せられるという事実である。上掲の資料は、いずれも語文出版社『教師用書』のものであるが、わずかな引用の中でも「中華民族の美徳」という表現が重複使用されており、ここには、「中華民族」が「勤労」「勇敢」「機知」「愛国」「愛家」など多様な美徳を備えた優秀な民族だという自負、強烈な自我意識が表現されている。その結果、木蘭は、様々な美徳を体現したスーパーヒロインとなり、「世界に冠たる」中華民族の象徴という記号を負わされるのである。

②「愛国主義の文学作品」

前述のごとく、台湾・南一書局版で強調された「考」の精神も、大陸では他の様々な美徳のうちに埋没してしまうのだが、その代わりに脚光を浴びるのが、「愛国主義」というものである。人民教育出版社『語文』教科書では、「木蘭詩」を第二単元に収めているが、単元の解説では収録作品のすべてが「愛国主義を表現している」という。

> 私たちの心のなかで、“祖国”とは普通の名詞ではありません。それは、大地、河川、言語、文化、民族、同胞などを意味しています。祖国を愛するとはすなわち、私たちが生きていくのに関係するこれらを愛することに他ならないのです。この単元の教材はすべて愛国主義を表現した文学作品です。同じ感情を各自に表現した作品は人々の琴線に触れるでしょう。この単元の学習においては、何度も朗読して、教材の思想的内容を全て感じとり、崇高な愛国主義の情操を身につけなければなりません[28]。

単元全体の説明ではあるが、当然そこに収める「木蘭詩」も「愛国主義を表現した作品」であり、この詩の学習を通して「崇高な愛国主義の情操を身につけなけらばならない」ということになる。これは、人民教育出版社『教師教学用書』からの引用であるが、語文出版社『教師用書』においても「愛国主義精神を体得すること」が「教学目標」に据えられており[29]、大陸にあっては、

「愛国主義」をキーワードにして、「木蘭詩」の解釈と教育が行われていることは間違いない。

しかしながら、実はこれほど「愛国主義」を強調しながらも、その「愛国主義」が詩の中でどのように展開されているかについては具体的な分析や説明がない。詩の解説に多くの紙面を割く教師用指導書（人民教育版14頁、語文版13頁）においても、木蘭の行動や心情のどこに、「愛国主義」が体現されているかには言及されないのである。

そのため、「愛国主義」という「読み」に対しては疑義が提出され、「換骨奪胎」「牽強付会」という批判も行われている。「《木蘭詩》は愛国精神を表現したのか？」[30]という文章での批判を要約すれば以下のようになる。

> 第一に、木蘭は父の苦境を理解して、やむなく（迫られて）従軍したのであり、国家防衛の大計を立てたからではない。第二に、戦場に赴く木蘭についても、意気揚々たる姿を描いてはいない。むしろ父母を思う哀しげな姿は同情すら誘う。第三に、愛国主義を最も効果的に表現できる戦場についても、「朔氣金柝を伝え、寒光は鐵衣を照らす」「将軍は百戦して死し」など、戦場のうら寂しさ（凄涼）、戦闘の残酷さしか描いていない。第四に、木蘭と家族との再会の場面には、こんなに愛し合う家族を引き裂いた戦争への憎悪、平和の尊さが描かれている。したがって、「木蘭詩」が「古代の労働人民の愛国精神を表現した」などというのは、詩の内容を換骨奪胎した牽強付会の論である。

この文章はインターネット上で公開されたものであり、作者については「ひとりの平凡な中学教師」というだけで、所属や氏名も明らかにされていない。そのため、どこまで信頼のおける資料かという問題はあるのだが、しかし、内容自体は詩本文の自然な解釈に即した批判だと言えよう。

③「愛国主義教育」運動

以上のように、一部に批判もあるものの、大陸の教科書や指導書では、「木

蘭詩」のヒロイン木蘭は幾つもの美徳を併せ持つ「中華民族」の象徴とされ、その美徳のなかでは特に「愛国主義」が称賛されている。

このような「解釈」を可能にする理由としては、映画『木蘭従軍』(1939年)[31]の影響を挙げることができるだろう。抗日戦争中に製作されたこの映画は、「古装片（時代劇)」のスタイルを借りつつ、現在の政情に即した「抗日救国」のメッセージを訴える「国防映画」として企画・製作され、受容された作品である[32]。この映画の大ヒットにより、占領下の上海映画界には「借古諷今（昔のことに託して現代を風刺する)」映画の流行をもたらすが、木蘭伝説には「外来侵略に反抗するナショナリズムの代弁者」[33]という強烈なキャラクターが加わることとなった。

『木蘭従軍』における木蘭像はその後も継承され、たとえば、2008年に日本公演された新編京劇『花木蘭～ムーラン～』においても、ヒロインは、敵国の侵攻という「国家の一大事」を前にして、「報国の男子」として戦場に赴く決意を固め、侵略者たちをなぎ倒すという、勇猛果敢な「愛国英雄」として表象されている。木蘭＝愛国主義の体現者というイメージは今なお流布しており、「木蘭詩」の解釈、評価にも少なからず影響を与えたと考えられる。

但し、これよりも大きく、さらに直接的な影響を及ぼしたのは、天安門事件後、特に1990年代後半から取り組まれた「愛国主義教育運動」であると言わねばなるまい。

この運動の契機となったのは、鄧小平の言葉、「（天安門事件について）もし誤りがあるとするなら…教育と思想・政治工作が極めて足りなかったことにある。中国はどんな国なのか、どのような国になるのかについての教育がとても少なかった。」[34]である。天安門事件の直後（1989年６月９日）に発せられたこの言葉は、世界を震撼させた事件から当時の「最高実力者」の得た「教訓」であり、これによって中国では「教育」に対する全面的な「見直し」と「改革」が進められることとなった。

1991年には、天安門事件後に党総書記、国家主席に就任した江沢民が、国家教育委員会主任・李鉄映らに書簡[35]を出し、中国近現代史教育と国情教育の徹

底を指示する。近現代史教育については外国の侵略への抵抗の歴史、国情教育については「五千年の歴史をもつ絢爛たる文化や中国人民の勤労精神、勇敢な精神」などの教育を重点的に行い、青少年の「民族的自尊心や自負心」を養成せよというのが、江沢民指示のポイントである。

これら最高指導者の言説を受けて、1994年には、「愛国主義教育実施綱要」[36]が発表される。同綱要は全8章40項目からなり、前文では「中華民族は愛国主義の栄えある伝統に富んだ偉大な民族」であり、この「伝統を継承し発揚」することが現在の極めて重要な任務であると強調される。その上で、学校に対して以下を内容とする「愛国主義教育」の実施を求めるのである。

（16）学校は青少年に対して教育を行う重要な場所であり、愛国主義教育を幼稚園から大学までの教育、人材育成の全過程に貫き通し、（中略）愛国主義教育の学科別計画を策定し、愛国主義教育の内容を分解して、各関係学科の授業の中に入れなければならない。

（15）（学校は）党の基本路線の教育、中国の近代史、現代史及び国情の教育、中華民族の伝統的な美徳、優秀な伝統文化の教育に取り組まなければならない。

（7）著名な人物及び中国人民が、外来の侵略と抑圧に反対し、腐敗した支配に反抗し、民族の独立と解放をめざして、戦友の屍を乗り越え、血を浴びながら戦った精神と業績（中略）を、人々に理解させなければならない。

この引用から分かるように、学校における「愛国主義教育」の核心は、「近現代史」「中華民族の伝統的な美徳」「伝統文化」の教育であり、その具体的な内容はたとえば、外来の侵略と戦った精神と業績への賛美であった。これに基づいて歴史教科書の大改訂が行われ、抗日戦争の記述が、「野蛮で残酷な日本の侵略」に対する批判を格段に強めると共に、それとの対比を通じて中国共産党と中国人民の英雄的な抵抗の事績を一層浮き彫りにする内容になった[37]。当然、国語教科書も「愛国主義教育」への対応を迫られ、2001年頒布の新学習指

導要領『語文課程標準』には、「教材は中華民族の伝統文化を継承・発揚することに注意し、生徒の民族意識と愛国主義を増強させる助けとならねばならない」と明記されている[38]。次の引用にもあるように、人民教育出版社が、「愛国主義精神の涵養」を「語文教学の目的のひとつ」と規定し、愛国主義の作品をひとつの単元に集めて収録するのは、この要求に対する回答なのである。

> 優れた文学作品の精読を通じて、知識を増やし、情操を陶冶し、崇高な愛国主義精神を身につけさせることは、国語教学の目的の一つである。本単元は祖国を主題にして、ジャンルの異なる五篇の作品を選んだ。これらはそれぞれの角度から、異なる時代、国家の人民が、祖国を熱愛し、祖国のために貢献する決意を固める美しい情操を表現している。本単元の教学目標は、教材に基づきながら、近代中国の国情（五四運動、九一八事変、抗日戦争など）を生徒に理解させ、祖国の山河、言語、文化を熱愛する愛国主義の情操を身につけさせることである[39]。

ここで言う5編の作品とは、「黄河頌」（光未然作）、「最後一課」（ドーテ作）、「艱難的国運与雄健的国民」（李大釗作）、「土地的誓言」（端木蕻良作）、「木蘭詩」の5編であり、近現代中国の作品から3篇、外国作品1篇、そして古代中国の作品からは「木蘭詩」が選ばれている。

このように、楽府「木蘭詩」は愛国主義を表現する古典の代表作と位置づけられ、ヒロイン木蘭の「救国英雄」というイメージは一層の定着が図られるのであり、それはすなわち、「愛国主義教育実施要項」で明記された「中華民族の伝統的な美徳」の教育、「外来の侵略と抑圧に反対し、民族の独立と解放をめざして、戦友の屍を乗り越え、血を浴びながら戦った精神と業績」を理解させる教育の実践に他ならない。

4．終わりに

「木蘭詩」は、「本来儒教的な家父長制制社会における＜忠＞と＜孝＞の道

徳規範を女子に教えるためのテキストとして普及したものだった」と言われている[40]。

実は南一版教科書においても、詩の内容を、「木蘭の代父従軍、忠孝共に備えた巾幗英雄の英雄行為を賛美している」と概括する記述もみられる[41]。ただ、すでに確認したように、同教科書は事実上「孝」という観点からのみ「木蘭詩」を評価し、教育目標に据えているのである。一方、大陸の二つの教科書においては、「愛国主義」がキーワードとなっており、しかも、「愛国主義教育実施綱要」には、「祖国の利益と尊厳」を守る必要性、「国家に少しでも多く貢献する」重要性が繰り返し強調されており、そこで言う「愛国主義」の根本には、「国家への忠誠」が据えられている。したがって、この文脈に沿って「忠」を「国家への忠誠」と読み替えたならば、大陸での教育目標は「忠」の養成にあるとも言える。かつての中国で女子教育の規範とされた「忠」と「孝」は、現代「中国」にあっては、大陸と台湾の「木蘭詩」教育によって、それぞれ分担されているわけである。

「孝」と「忠」という問題につてはさらに、冒頭に引いた晏妮論文に興味深い指摘がある。「孝」「忠」をキーワードにして、楽府「木蘭詩」と映画『木蘭従軍』を比較する部分である。

> 原典の『木蘭辞』を読み返すと分かるのだが、病弱の父親の代わりに戦場に赴くことは、完全なる孝行の行為として称えられているが、「忠誠」の方がおろそかにされており、また、女性が一時の男装というジェンダー規範から遊離した行為も「男尊女卑」に挑むより、やはり「孝行」の主題に収斂されている。(中略)
>
> だが、(中略)映画『木蘭従軍』の場合、「孝行」よりも「忠誠」が重要視され、しかも「国」への「忠誠」だというディスコースに変化している。このようにすると、「孝行」が「忠誠」に埋没してしまっただけでなく、「主臣関係」であるはずの「忠誠」は個人対個人でなくなり、個人対国家という構図で新たに描き出されている。(中略)木蘭の肩には、「国家」がどっしりと横たわるようになったことは自明であろう[42]。

上掲の「木蘭詩」と『木蘭従軍』の対比は、「孝行」を「中軸」に据えた台湾と、「国」への「忠誠」が重要視される大陸、というように、そのまま「木蘭詩」解釈における台湾と大陸の相違にスライドできる。

あるいはまた、大陸にあっては、「孝行が忠誠に埋没され」た結果、楽府「木蘭詩」と映画『木蘭従軍』が同化し、ヒロイン木蘭の肩には「国家がどっしりと横たわる」のだと概括することもできよう。

以上をもって、この拙い文章の「まとめ」とするが、最後に、残された課題について少し触れておく。何よりも、台湾の教科書が一社だけであり、今後は他の出版社についての分析が必要である[43]。その上で、他の教科書もやはり「考」を強調しているのであれば、それは台湾の政治や社会とどう関係しているのか（あるいは関係していないのか）を明らかにする必要がある。さらに、教科書には、木蘭を描いた図版（挿絵）を数多く掲載しており[44]、これも含めて、絵画における木蘭像の表象を分析するという作業にも興味を惹かれる。いずれも今後の課題としたい。

注　釈

1）「木蘭詩」は南北朝時代の古楽府。「木蘭辞」とも言う。作者不詳。宋・郭茂倩撰『楽府詩集』、清・沈徳潜撰『古詩源』等に収録。

2）唐・白楽天作「戯題木蘭花（戯れに木蘭の花に題す）」（絶句）。
　唐・杜牧作「題木蘭廟（木蘭廟に題す）」（絶句）。

3）明・徐渭撰「雌木蘭替父従軍」。「雌木蘭」を主人公にした雑劇。参考資料として日本語訳に解説を付した堤耕次・高峰訳著「徐渭と『雌木蘭替父従軍』」（『愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編）』47　1998年3月）がある。

4）清・褚人獲作『隋唐演義』（小説　100回）。第56回（啖活人朱燦獣心　代従軍木蘭孝父）、第57回（改書柬竇公主辞姻　割袍襟単雄信断義）、第61回（花又蘭忍愛守身　竇線娘飛章弄美）に、「花木蘭」とその妹「花又蘭」が登場。日本語の翻訳（翻案）として田中芳樹著『隋唐演義①～⑤〉』（中公文庫）、安能務著『隋唐演義 ㊤㊥㊦』（講談社）がある。

5）晏妮著「伝説のヒロインから国民の表象へ―『木蘭従軍』の受容の多義性をめぐって」

（『映像学』第74号　日本映像学会　2005年５月）

６）井波律子著「美少女戦士ムーランの物語」（井波律子著『中国文学の愉しき世界』　岩波書店　2002年12月）

７）①人民教育出版社『教師教学用書　語文　７年級　下冊』

（人民教育出版社2001年12月　第１版）

②語文出版社『教師用書　語文　７年級　上』

（語文出版社　2004年５月第三版　2007年６月第15次印刷）

③南一書局『國民中學　國文４　教師手冊』

（南一書局企業股份有限公司　中華民国95年２月初版　97年２月修訂版）

８）三社以外にも以下の教科書に「木蘭詩」を収録していることを確認済。

『九年義務教育三年生初級中学教科書　語文　第一冊』

（北京出版社・開明出版社　2002年６月第６版）

『義務教育課程標準実験教科書　語文　七年級　下冊』

（江蘇教育出版社　2002年12月第２版）

『華國　初中國文　第一冊』

（華國出版社　中華民国39年８月初版）

９）「南北朝時代の北方民歌（民間歌謡）」（語文版）、「南北朝時代の北方の楽府民歌」（人教版）、「北朝の楽府民歌」（南一版）。

10）井波律子著「美少女戦士ムーランの物語」（注６参照）

11）テキストは郭茂倩撰『楽府詩集』巻25梁鼓角横吹曲辞（文学古籍刊行社　1955年６月）を使用。

12）日本語訳は、黒川清孝『漢詩大系　第５巻　古詩源下』（集英社　昭和40年２月　p353～357）、小尾郊一・岡村貞雄訳注『東海大学古典叢書　古楽府』（東海大学出版会　昭和55年２月p90～99）を参照した上で、主に、加藤徹氏のホームページ（http://www.geocities.jp/cato1963/chugokubungaku-a.html#03）より引用した。

13）井波律子著「美少女戦士ムーランの物語」（注６参照）

14）例えば映画『木蘭従軍』（1939年）では、木蘭の艶やかさを強調するために、声色としぐさの女らしさ、色っぽさをいかに演出するかに腐心しているし、京劇「木蘭従軍」日本公演（2008年５月）においても、真っ赤な衣裳を身に纏う、輝くばかりに美しい木蘭の登場が、最も華やかで印象的なシーンとなっていた。

15）台湾・南一書局版『国文』は、「木蘭詩」に合計10頁（p78～87）をあて、「学習重点」「課文導読」「作者介紹」「課文与注釈」「課文賞析」「問題与討論」「語文部落格　楽府詩簡介」「応用練習一、二」などの多様な情報を生徒に直接発信する。大陸の教科書が本文・語

釈・練習問題のみであるのとは対照的である。

16）単元四「親情無限」には、「木蘭詩」とともに、Douglas MacArthur元帥の「麦師為子祈祷文」（原題Gneral MacArthur's Prayer For His Son）を収録。

17）「類畳」（また「反復」）は、連続あるいは間隔をおいて、同一の語、句、句群を繰り返して感情の発露や思想的表現を鮮明にし、リズム感を出す。A③④「問女何所思，問女何所憶。女亦無所思，女亦無所憶。」やB①②「東市買駿馬，西市買鞍韉，南市買轡頭，北市買長鞭。」などがその好例である。（以上、南一書局『教師手冊』）

18）「頂真」（また「聯珠」）は、前句の末尾を次句の冒頭に使用することにより、前後の繋がりを強め、語気の一貫性を出す用法。A⑤「軍書十二卷，卷卷有爺名」、C③D①「將軍百戰死，壯士十年歸。」「歸来見天子，天子坐明堂」、E⑦「出門看火伴，火伴皆驚惶」などがその例である。（同前）

19）「拝批」とは、構造が似通い,意味が密接に関連し,語気がそろった三つ以上の句または文を並列する修辞法（以上、『小学館　中日辞典第二版』）。「木蘭詩」では、E①②③「爺孃聞女來，出郭相扶將」「阿姊聞妹來，當戸理紅妝」「小弟聞姊來，磨刀霍霍向豬羊」がその例であり、木蘭の帰郷を待ち望む家族の気持ちがより強調される。

20）南一書局版『国文』教科書p83～84「課文賞析（本文の鑑賞と分析）」。

21）南一書局版『国文』では、「願馳千里足，送兒還故鄉」（E④）を、「願借明駝千里足，送兒還故鄉」とする。

22）南一書局版『教師手冊』p182「問題与討論参考答案」。

23）南一書局版『国文』教科書p78では「学習重点」として、「認識樂府詩」「學習詳略得宜的敘事手法」「體會木蘭孝親的情操」の三点を挙げる。

24）人民教育版『教師教学用書』p87「二、問題研究　4．如何理解『木蘭詩』中的繁簡処理？」

25）語文版『教師用書』p399「有関資料一．従≪木蘭詩≫詳略的安排看其主題」

26）語文版『教師用書』p404「有関資料三．教案示例（五）立足全詩，把握形象」

27）語文版『教師用書』p395「課文説明」

28）人民教育版教科書『語文』p42「第二単元　単元説明」

29）語文版『教師用書』p 402「三、教案示例　一、教学目標」

30）「『木蘭詩』表現愛国精神了嗎？」。出典は、中学語文網http://www.5156edu.com

31）映画『木蘭従軍』（1939年 中国聯合影片公司華成製作廠）。製作者：張善琨　脚本：欧陽予倩 監督：卜万蒼　主演：陳雲裳、梅熹。脚本は、『文献』第６巻（1939年３月10日）に発表。『中国新文学大系 1937～1949　第18集　電影巻１』（上海文芸出版社　1990年）p15～63にも収録。

32）鷲谷花「花木蘭の転生－「大東亜共栄圏」をめぐる日中大衆文化の交錯」p145（池田浩

士編『大東亜共栄圏の文化建設』　人文書院　2007年１月）

33）晏妮著「海を渡った木蘭（ムーラン）」（京劇『花木蘭～ムーラン～』上演プログラムp7 制作・編輯：楽戯社　発行：日本経済新聞文化事業部　2008年５月31日）

34）鄧小平「在接見首都戒厳部隊軍団以上幹部時的講話」（1989年６月９日）。引用は『鄧小平文選1982～1992』（東和文化研究所・中国外文出版社　1995）ｐ310。

35）「江沢民総書記致信李鉄映何東昌強調進行中国近代史現代史及国情教育使小学生中学生大学生認識人民政権来之不易、提高民族自尊心自信心」（1991年３月９日　正式公開は『人民日報』1991年６月１日）。

36）中共中央「愛国主義教育実施綱要」（1994年８月23日）。引用は中国研究所『中国年鑑1995年版』（1995年７月）による。

37）拙稿「中国の歴史教科書における＜抗日戦争＞㊤」（『愛媛大学法文学部論集人文学科編』20号、2006年２月）参照。

38）中華人民共和国『全日制義務教育語文過程標準実験稿』（2001年）。引用は教育部基礎教育課程編集部組織編写『中学新課程資源庫』（北京工業大学出版社　2004年２月）

39）人民教育版『教師教学用書』p48「第二単元　単元説明」

40）Wang Zheng, Women in the Chinese Enlightenment : Oral and Texual Histories, Berkeley: University of California Press, 1999, pp. 20。引用は註32より。

41）南一書局版『国文』p77「第二単元≪親情無限≫」

42）前掲晏妮論文（註５）参照

43）台湾で中学用国語教科書『国文』を発行しているのは、南一書局のほか、康軒（文教集団）、育成書局、翰林翰林出版事業公司の三社がある。今回の検討対象は南一書局版だけであり台湾の教科書全体を網羅しているわけではないが、南一書局は小・中学校の全教科、高校の芸術・体育等を除く９科目の教科書を出版し、審査合格率と販売数トップを誇る教科書会社であるので、台湾の教科書の傾向を知るには十分だろう。以上は、台湾教科書審査を行う国立編訳館HP、南一書局企業股份有限公司HPによる。

・国立編訳館http://www.nict.gov.tw/tc/allinfo.php

・「南ｅ網」http://www.nani.com.tw/nani/2007naniweb/NANI_index.jsp

44）大陸の人民教育版は一枚、語文版には南一版には郵便切手の図版が４枚（p161、162）、台湾の南一版は４枚の図版が掲載されている。人民教育版はp66全頁を使う絵、語文版は郵便切手の図版、南一版は現代の絵本風の挿絵である。